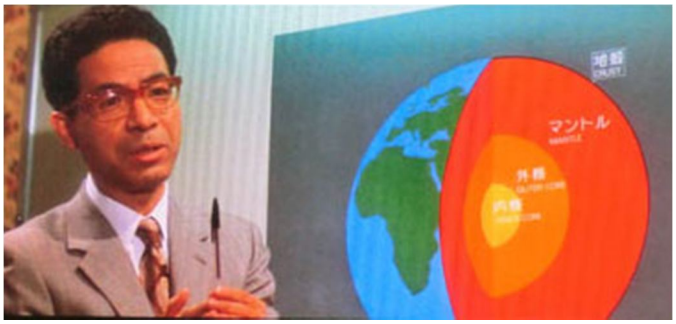
「日々の理科」（第 879 号） 2016（H28）,12,-2

「竹内　均博士の思い出」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

私は子どもの頃から科学が好きだった。河原に化石を探しにいったり、PSSC を見ながら簡単な物理の実験もした。中でも化学（バケガク）は一番興味を持っていて、近所の普通の薬局で、化学薬品を注文しては部屋の本棚に並べて喜んでいた。

そのころ、父に連れられて、八王子の小さな映画館で「日本沈没」という映画を見た。映画の中で、地球物理学者が登場し、首相（丹波哲郎）に大陸移動説を説明する場面がある。私はその時　地球規模の大きな変動があることをはじめて知り、感動したのを覚えている。その説明役が竹内　均博士（映画の中でも実名で登場）である。（画像は「日本沈没」の一シーン）



東京大学教授だった博士は、定年退官後、雑誌「ニュートン」の編集長として、科学教育の普及に努めらた。私は創刊号から読んでいるが、その行動力と文章表現力には常に感銘を受け、最も尊敬する人物の一人だった。（“もりいずみ”の連載は、博士自身の原稿である）幸いにも、私が教育雑誌の編集に関わっていた時、博士に面会するチャンスに恵まれた。

「ニュートン」
竹内　均博士の
追悼号（2004 年 7 月）

編集長室に招かれ、まず驚いたのは、背後の本（約 300 冊）が全部ご自身の著書だということ。博士は「１日 10 枚の原稿を書けば、１ヶ月で１冊本ができます。それを 25 年続けたらこうなりました」と軽々とおっしゃった。

お話を伺う中で私は、科学者としての竹内博士よりも、分け隔てのない人間性に強く惹かれた。たった数時間の対面だったが、その後の私の生き方を決定づけた瞬間だったように思う。一度、本校の公開研究会の講演者をお願いし、博士も快諾してくださった。会議では候補に名があがったものの、実現できなかったことが、本当に悔やまれる。博士はすでに故人である。

博士は帰り際に玄関まで見送ってくださり、「またお越しください」とおっしゃった。今でも黄色い眼鏡の下の、やさしい眼差しが思い出される。